



さんないまるやまいせき

## 三内丸山遺跡は、どんな遺跡なの



青森市にある、縄文時代の集落あととしては初めて見つかった、大集落のあとだよ。

## 青森市で、縄文時代の集落のあとが見つかった

三内丸山遺跡は、青森市内で1992年から発掘された、縄文時代前期～中期(5500～4000年前)の大集落のあとです。ふつうのたてあな住居が約700けん、長さが10メートルをこえる大型のたてあな住居が約20けん見つかりました。すてられた不用品が積み重なった小山からは、土器、石器、漆器、動物の骨や角でつくった道具、土偶、植物の種、ひすいの玉などが出てきました。

## 太い柱を使った、高い建物があつた

遺跡の中で、特に注目されたのは、高さが20メートル以上あったとみられる、大きい建物のあとです。直径1メートルもあるくりの木の柱を、6本立ててつくったようです。このような大木を切りたおして運び、大きい建物をつくるには、高い技術があつたことや、おおぜいの人を監督が指揮する社会ができていたことを、示しています。建物の使いみちについては、物見やぐら、灯台、お祭りの施設など、さまざまな説があります。また、大きいたてあな住居は、冬に人々が働く作業所や、集会所として使われていたとみられています。

## 縄文時代のイメージを変えた

縄文時代は、かつては、4、5人の家族が住んでいるたてあな住居が、10けんほど集まり、かりや漁をしたり、貝や木の實をとったりしながらくらしていた時代、とみられていました。しかし、この三内丸山遺跡が、1500年間も続いた大集落であることがわかってから、今までの縄文時代のイメージが、まったく変わるようになりました。